
ずっと

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ずっと

【Nコード】
N6228G

【作者名】
石子

【あらすじ】
私は都会の喧騒から離れたくて、雪山に来ていた。そこでお世話になっている多津子さんはとてもやさしい人だが……

小鳥のさえずりが聞こえてきた。カーテン越しに部屋に入ってくる明るい光が、朝になったことを伝えてくる。

なかなか温かい布団の中から出ることが出来ずに、私はベッドでまどろんでいた。

「お母さん。私、今日も帰りが遅くなると思うから先に晩ご飯食べてね」

「はいはい。なるべく早く帰ってきなさいよ。優子の好きな豚汁作って待つてるから」

「うん！　じゃあ行つてきまーす」

……階下からは、多津子さんと娘の優子さんの会話が聞こえてくる。

昨日も同じように、遅くなると言つて優子さんが出掛けて行くのをベッドの中で聞いた気がする。

私ももう起きないと。

そう思つて、気合を入れて布団を押しつけた。

冷たい空気にさらされて身震いする。外を見ると、相変わらずの雪景色。日の光が反射してきらきりと眩しい。

近所の子ども達が外で遊んでいる声が聞こえてきた。部屋の窓からは姿が見えないが、寒さなんて吹き飛ばす勢いで走り回っている姿が容易に想像できる。私も雪の積もる地方で育ったので、子どもの頃はよく雪遊びをしたものだ。

そんな風に懐かしい気持ちになつて、なんだかちよつと違和感を覚えた。

私は、ここにいてはいけないのかもしれない。ふいにそう思ったのだ。

その考えを振り払うかのように急いで身支度を整えると、多津子さんのいる台所へと階段を下りた。

「おはようございます」

笑顔で迎えてくれた多津子さんを見て、私も笑顔で挨拶。

「葵さん、よく眠れましたか？」

「はい。優子さんはもう出掛けたいですね」

「ええ。優子ったら最近仕事が忙しいみたいで」

言いながら、多津子さんはテーブルに私の分の朝食を並べてくれる。白いご飯に焼き魚。温かい味噌汁。

贅沢だなあ、なんて思いながら椅子に座る。

一人暮らしの私は、普段こんなにゆつたりと朝食をとることはない。

都会の喧騒から離れた、雪に覆われたこの家にやってきてまだ三日目だ。

今お世話になっている多津子さんの娘さん、私と同年代のようだが、それが優子さん。実はまだ彼女と直接会っていない。なんとなくすれ違いになって、……というより私がぐだぐだ寝ている間に彼女は仕事に出かけてしまって、顔を合わせることが出来ないでいた。優子さんのことを話す多津子さんはとても楽しそうで、仲が良いんだろうなと思う。

うちの口やかましい母親やいつも無表情で何を考えているのかわからない父親とは雲泥の差だ。私のお母さんも多津子さんみたいな人だったらよかったのに。

そんなことを考えながら朝食に手を付ける。

その時、裏口から多津子さんと呼ぶ声が聞こえてきた。

「多津子さん。炊き込みご飯、うちでたくさんつくったからお裾分けにきたわよー！」

近所の奥さんだ。昨日もほとんど同じ時刻にやって来て、同じよ

うに声を掛けていたので、私もその声を覚えている。きっと毎日の生活パターンが規則的なのだろう。

「はいはい！」

多津子さんも負けじと声を張り上げる。

裏口に小走りで向かう彼女に私は声を掛けた。

「後片付け、私がやるときますからごゆっくり」

「ありがとうございます。じゃあ、お願いしちゃいますね」

言って、台所から出て行き、すぐに裏口の戸を開ける音が聞こえた。それからは訪ねてきた奥さんとの世間話に花が咲いているようだった。

一人になった食卓で、私は外を眺めた。二階の私の部屋とは別の方向が見える。

少し先には隣の家が見えるし、ちょうどこの家からの中間地点くらいには大きな雪だるまがドンと存在感を主張している。子ども達が作ったのだろうが、結構な大きさでその力作具合が伝わってくるようだ。

朝食を食べ終え、食器を流して洗いながらその風景をなんとなく眺める。裏口からは、まだ多津子さん達のおしゃべりの声が聞こえてきていた。

会社から首を言い渡されたのは、彼氏から別れようと言われたのとほぼ同じ時期だった。

どちらも予感があった。

小さい会社だったし、このところの不況で経営状態も悪かった。そろそろ倒産するかもね、なんて同僚と洒落にならないことを言い合っていたが、とりあえずという感じのリストラで事務の女性が数名解雇された。その中に私も入っていたのだ。

しょうがない、という気持ちはあった。しかし、同期の子は首に

はならなかった。

私とその子は同時期に入社して、仕事量も同じくらいで、どちらかというと私の方が手際がよかった。首にするのはどちらでもよかったのかもしれない。それでも、その彼女は会社から必要とされて、私は要らないと判断されたことに変わりはない。

「別れよう」と彼が言い出した時には、すんなりとその提案を受け入れた。

二人とも仕事が忙しい、と会わない時間がかなり増えていた。だけど、わかつている。忙しさにかまけて会う時間を作ろうとしなかったただけだ。

そういう距離感がお互いに煩わしく、別れるのは自然の成り行きだと思っていた。

でもその後すぐに、彼が他の女の子と付き合い始めたことを友達伝いに聞いた。

別れたことを悲しいとは思わなかったが、私は彼にとっていなくていい存在だったのだと思うと無性に悲しさが込み上げてきたのを覚えている。

私の帰る場所は、もうどこにもない。

洗い物を済ませると、私はまた二階の部屋に戻った。

散歩でもすれば良いのかもしれないが、何故かそんな気分にはなれなかった。

……とにかく都会から離れたい、と雪山のツアーに申し込んだのは衝動的だったかもしれない。

ある程度の貯金はあったので、次の仕事を探す前に気持ちを整理したいと思った。

場所を変えたからといって気持ちに区切りがつくかどうかはわか

らなかったが、とにかく日常を一旦離れたかったのだ。
とりとめなくそんなことを思っていると、また違和感のようなものに襲われた。

なにかとても大切なことを忘れているような気がする。

思い出さなければいけない。

でも、まだしばらくはここでやさしい時間に包まれていたかった。
正午が近づいてきたら多津子さんと一緒にお昼ご飯をつくって、
おやつの時間にはお菓子をつまみながら多津子さんが楽しそうに優
子さんの話を話すのを聞こう。

昨日と同じように……。

朝日が窓から差し込む。

小鳥のさえずりが聞こえて、私は目を覚ました。
階下からは優子さんの明るい声。

「お母さん。私、今日も帰りが遅くなると思うから先に晩ご飯食べ
てね」

「はいはい。なるべく早く帰ってきなさいよ。優子の好きな豚汁作
って待つてるから」

「うん！　じゃあ行つてきまーす」

外で遊んでいるのであるう子ども達のはしゃいだ声を耳にしながら
階段を下りて、台所へと向かう。

「おはようございます」

「葵さん、よく眠れましたか？」

「はい……」

テーブルに並べられた朝食。

窓から大きい雪だるまが見える。はじめて見た時と全く同じ姿。

こんなに良い天気で、昼間は太陽にさらされているのに。

「雪だるま、溶けないんですね。この辺り、寒いからでしょうか？」
多津子さんも私の視線をたどるように窓の外を見る。

「ああ。あの雪だるま。今日の朝、近所の子ども達が生懸命つくってましたから。でもお昼にはちよつと溶けちゃうかもしれませんね。いい天気ですし」

……私はしばらくその言葉の意味を考えていた。昨日も一昨日も、あの雪だるまの姿は変わっていない。
ゆつくりと多津子さんを振り向く。

聞かなければならない。

「『今日』、は何月何日ですか？」

多津子さんはためらいなくそれに答えた。

「四月二日ですよ」

そのまましばらく二人で見つめ合う。

私は思い出していた。

雪山ツアーに出発したのは四月一日。インストラクターに付いて数名で雪山を歩くというもので、私のように山登り初心者でもついていけるような簡単なコースだった。

それでも突然天候が悪化し、突風にあおられた私は皆とはぐれた。雪が舞い上がり数メートル先も見えないし、立つこともできなくなつて。

もうここで死んでしまってもいいかな。戻ったところで、私には行き場もないし。

そんな風に思ったところまでは覚えていて。そこから記憶が途切れ……。

目が覚めたときにはこの家にいた。ここで過ごすのは四日目だ。今日が四月二日であるわけがない。それでも、ここでは四月二日が繰り返されている。

「多津子さん。炊き込みご飯、うちでたくさんつくったからお裾

分けにきたわよー！」

裏口から声が聞こえてきた。

多津子さんはそれに応えずに、私の方を見つめ続ける。

ここに来てから、私は多津子さん以外の人間を見ていない。

多津子さんは軽く息を吐き出して、それから言った。

「葵さん。あなたはそろそろ帰らなくてはいけませんね」

「……えっ？」

多分、私は死んでしまったんだ。そして、多津子さんのいるこの不思議な空間に迷い込んだのだと思った。

それなのに、帰る、とはどういうことなんだろう？

「わたしは、優子が帰って来るのを待つてなくてはいけませんから」
「……どういうことですか！？ 私……、私には帰るところなんてありません！ ここにいちやいけないんですか！？」

「あなたには、待つてる人がいるでしょう？」

それが合図だったかのように、多津子さんの姿が揺らいだ。家も、周りの物もすべて蜃気楼のように揺らいで私の目の前から消えていく。

多津子さんの、少し悲しげなやさしい笑顔を最後に私の意識は途切れた。

目をあけると、天井が見えた。

ここはどこだろう？

とにかく状況を把握しようと上体を起こしたところで、思い切り抱きつかれる。

「葵！ あんたはもう！ほんとに心配ばかりかけて！ 雪山で遭難したなんて聞いて寿命が縮まったわよ！」

「……お母さん？」

見ると、数人が私の様子を心配するようにのぞき込んでいた。

その中には、雪山ツアーで一緒だった人達もいる。どうやら私は麓の休憩所のベッドに寝かされていたようだ。

「私、どうしたの？」

その間の抜けた質問には、横で腕組みしているお父さんが答えてくれた。

「おまえ、四日間も行方不明だったんだぞ。連絡を受けて母さんと二人でとんできたんだ。地元の捜索隊の方々にも迷惑かけて。ほんとに、しょうがない奴だな」

殊更、顔をしかめて言う。

お父さんは、ほっとした時とか嬉しい時とか、素直にそれを言えなくていつもより更に無愛想な物の言い方をする。それを思い出して、なんだか懐かしくなった。

「ほんとに！　ほんつとに心配したのよ！　でも、無事でよかった。よかったわ」

私に抱きついたまま、涙まじりで言うお母さん。いつもの口うるさい調子が高なだか心地良い。

私は、なにか言わなくちゃ、と言葉を探したが、頭に浮かぶのは一言だけだった。それを伝えよう。

息を吸い込んで、お母さんとお父さんに向けて私は言った。

「ただいま」

私は四日間も遭難していたのだが、衰弱が少なく驚かれた。そもそも生きていたこと自体も奇跡的だと言われ、ちよつとした噂になったりしていたようだ。

あの辺りは山小屋もないし、どうやって飢えや寒さを凌いだのか不思議がられたが、私にもわかりません、としか答えようがなかった。

後日、麓の町の人に聞いたところ、昔、この山の中腹、ちょうど私が遭難した辺りには小さな村落があったそうだ。

その村が、大規模な雪崩に飲み込まれたのが四月二日。その日、村の人達の日常は一瞬にして断ち切られた。仕事や用事などで町に出ていた数名の村人以外は助からなかった。もう、二十年以上も前の話らしい。

私は多津子さんのことを思い返していた。

あの数日間は、このまま死んでしまってもいいと思った私の心が見せた、ただの幻だったのだろうか。

しかし、そうでないとしたら。

あの日、遅くなると言って出掛けた優子さん。

多津子さんは、今でも一人で四月二日を繰り返し、優子さんが帰ってくるのを待っているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6228g/>

ずっと

2010年10月8日11時57分発行